

# 中部編

長野県立信濃美術館  
(川上冬崖作品所蔵)

(長野市箱清水1-4-4 城山公園内 026-232-0052)



川上冬崖

(NHK「歴史ドキュメント8 地図は国家なり」日本放送出版協会より)

川上冬崖(かわかみとうがい 1827- 1881) こと川上寛は、明治洋画壇の重鎮で、画塾を開き西洋画の普及に努めた一方、陸軍参謀本部地図課の職員として、フランス式近代地図として名高い「二万分の一迅速測図」の作成に指導的役割を果たした人である。

冬崖は、文政10年(1827)信濃国福島新田村(現長野市北屋島)の農家山岸家に生まれ、11歳のとき須坂の神社宮司の家に移り住み藩塾に通った。15歳になって、士官の小河原家に望まれて養子に入るが、その家の娘との結婚を勧められたことを期に江戸に出た。

上野寛永寺の脇寺で働くとき大西椿年という南画の師に出会い、更に故あって幕府御家人川上家の婿養子となったことで蕃書調所に出仕した。さらに、同所が開成所となるに及んで、絵心を見込まれ西洋画の研究に携わることになった。

明治維新後も、他の優れた幕臣と同様、新政府にも招かれ、再興された開成所に出仕し画学教授のかたわら私塾を開いた。この間、図画教本「西画指南」を著すとともに、のちに洋画壇で活躍する多くの門人を育てた。だが、その後開成所を改組した大学南校を辞し、陸軍省兵学寮に出仕、図画教育に当たった。

冬崖は、明治6年(1873)に「地図彩色」を、翌年には「写景法範」を、続いて種々の実験を積み「東京近傍写景法範」を最初の石版本として刊行した。これらの風

景や建造物、人物などをモチーフにした図画教本をもとに、陸軍内の図画教育が行われた。また、当時地図課では地図製図に従事する者として画家を採用しており、冬涯を中心にして、浮世絵、漢画、日本画、水彩画、油絵、そして漫画をするものなど多彩な顔ぶれが揃っていた。

そうした明治13年、冬涯の教育を受けた測量師や測量手らによって、あの地図彩色と余白に描かれた色鮮やかなスケッチの記入で有名な「迅速測図」約900枚の作成が始まったのである。

ところが、この地図作成の最中の明治14年に、陸軍の内部抗争ともいわれる、謎の多い清国への「地図密売事件」にまきこまれ、冬涯は熱海の療養先で非業の死を遂げた。

冬涯の実家は、長野市の東、千曲川に近い北屋島にあり、後を継いだ兄の末裔が暮らしている。



川上冬崖の作品(県立信濃美術館蔵)

冬涯の作品は、長野県立信濃美術館に百点以上が所蔵されている。墓は、東京上野の谷中墓地にある。(→川上冬涯の墓→木村信卿の墓)

日本民俗資料館（陸地測量部ゆかりのイギリス製置き時計）

（長野県松本市丸の内4-1 0263-32-0133）



陸地測量部ゆかりのイギリス製の置き時計  
（日本民族資料館蔵）

昭和19年（1944）にもなると、日本にとっての太平洋戦争は、ますます不利な状況になり、軍部は本土決戦に備え始めた。

東京もB29による空襲が頻繁になり、同年4月に陸地測量部も三宅坂から杉並の明治大学校舎に移り、さらに戦況が悪化した同19年5月には、松本市近郊の波田村に2回目の疎開を行った。また、その疎開に備えて新宿駅にあった貴重な資料が空襲により焼失したという。

翌昭和20年8月15日終戦を迎えた。

「陸地測量部」は、この際その名称を「内務省地理調査所」と改変しようとしていた。名称をこれに変えようとした裏には、地図・測量だけでなく地理調査にも力を入れるというような仕事の変化ばかりではなく、軍事色を薄める目的や戦後復興に必要な資料を進駐する米軍の手から守ろうとする考えもあったようである。

当時の波田国民学校日誌には、「9月2日に内務省国土局地理調査所開所」とあり、この日をもってカモフラージュされたともいえる。

昭和20年9月25日米軍が初めてここを訪れた。疎開していた陸地測量部、正確には地理調査所が所蔵する地図等を接收するためであった。

それまで、同19年11月4日には、緊急時には事前認可無しで焼却し、事後報告で可ともするしじもあり、8月15日には、大本営陸軍部参謀総長より全陸軍に対して、

「陸軍秘密書類焼却ニ関スル件」通牒されて、外邦図などの地図は焼却を命ぜられた。その後、8月19日には、大本営陸軍部参謀本部総務課長より、関係機関に対して、「情勢ノ変転ニ伴フ作戰用地図ノ処理要領ノ件」が通牒される。これは、15日付の焼却命令の事実上の撤回であった。

そして、米軍によって地図と器材の接收も行われた。地図については大量の外邦印刷図と万国100万分1原版（京城その他）などの地図原版が、器材ではプラニグラフ05、マルチプレックス、クロノメーター、インバール製基線尺、1等水準儀などが、また「古い製図の器材までも持っていった」といわれるほど多くのものが接收されたようだが、その一部は後日返還された。

一方で米軍は、陸地測量部の技術者力を利用することに興味があったようで、昭和21年からは、マッカーサー司令部からの作業命令が相次いだ。それら技術者による測量は、日本だけでなく信託統治する南太平洋の島々まで及び、その内容は刺針作業や基準点調査が主であった。

そして、昭和22、23年にかけて撮影された日本全国の空中写真は、国土開発が進む前の日本の原風景を記録した「米軍の空中写真」として、今も親しまれ、利用されている。短期間に全国を網羅した最初の空中写真である。その後、この空中写真を利用して、本格的な写真測量による地形図の作成が開始され、写真測量の時代がやってくる。

地理調査所は昭和21年になると、現千葉県稲毛区に移転し、さらに東京都目黒区（昭和33年）に移転し、「国土地理院」と名称を変更した（昭和35年）。これで元通りに、名が体を現す役所になった。

こうした歴史を見ていた三宅坂の陸地測量部の正面玄関にあった、高さ202cmもあるイギリス製の置き時計は、組織とともに波田国民学校に疎開し、米軍接收前後に同校に贈られた。

現在は、世界の古時計を多く所蔵する松本市の「日本民俗資料館」で展示されている。

## 日本一海から遠い地点

(長野県佐久市臼田町)

日本で、海から一番遠い地点、それは長野県南佐久郡臼田町の東部、北緯 36度10分25秒、東経138度35分01秒の地点である(ただし、これは旧日本測地系座標、国土地理院のHPで単純に変換した世界測地系座標は、36度10分36秒 138度34分50秒)

この地点は、静岡県富士市の田子の浦港から114.86km、新潟県上越市直江津から114.86km、糸魚川市梶屋敷から114.87km、神奈川県小田原市国府津から114.86km離れているという。



臼田町の位置

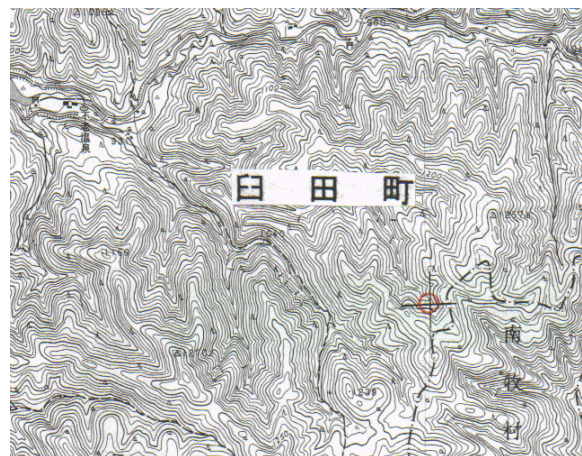
この一見無意味でもあり、意味がありそうな地点を測定したいきさつは次のとおりである。

国土地理院では、毎年6月3日「測量の日」の前後と夏休みの2度、併設されている「地図と測量の科学館」で地図測量に関する相談コーナーを開設している。

その夏休みの地図測量相談で、「(日本の)海から最も遠い地点はどこですか」という質問が寄せられた。担当者は、即答することができず、後日回答することを約束した。

担当者には、一見簡単そうに思えた質問であったが、検討してみると意外に複雑な計算が必要になった。概算によって求めた候補地に、コンピュータにより内接する円を求め、これをもとに求めた最遠地点がこの地である。

ちなみに、この方法で求められた、二番目に海から遠い地点は、北海道美瑛岳の東約7kmの地点で、海から距離は108.2kmである。



1/25,000地形図「信濃田口」



信濃教育博物館（東福寺泰作の「松代封内測量図」）所蔵

（長野県長野市旭町1, 098 信濃教育博物館）



東福寺泰作

（「江戸時代の測量術」展図録 安城市歴史博物館より）

東福寺泰作（とうふくじたいさく 1824-1901）は、更級郡氷鉋村（ひかのむら：現長野市）に生まれ、松代藩士池田定見について算術を学んだ。残された免許状によると、その後弘化3年（1846）に清水流測量術の皆伝となった。

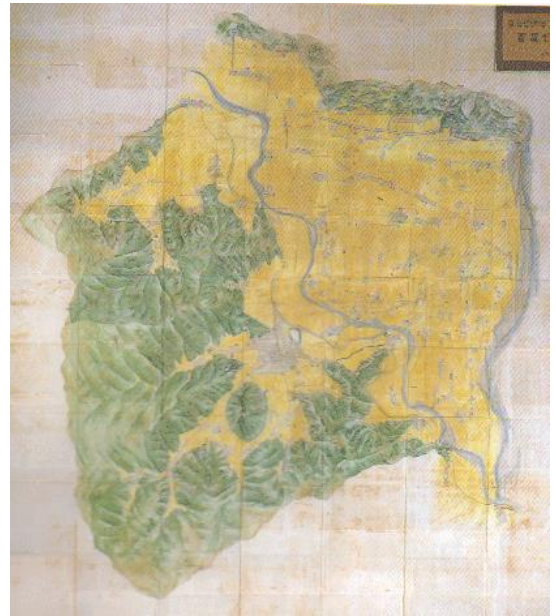
そこころ松代藩は、元禄の国絵図では不十分であるとして、嘉永3年（1850）東福寺泰作に領内の測量と実測図作成を命じ、安政2年（1855）に完成を見たという。

完成した「松代封内測量図」は、全11図、縮尺は約1/6000である。測量には絵師田中月耕を同行させた。

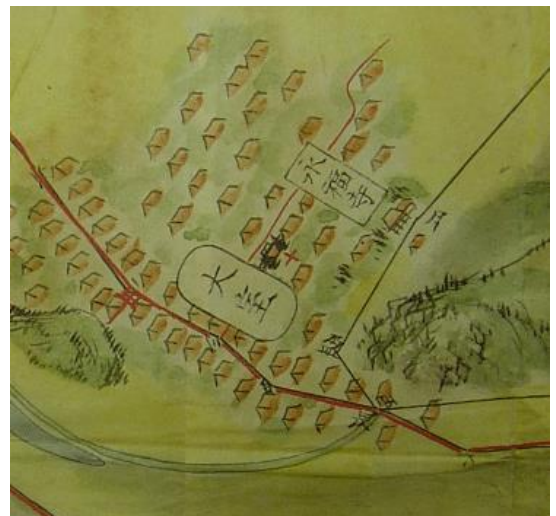
東福寺の手による測量成果のうち、地図と製図器具類は信濃教育博物館に、測量・和算の書は日本学士院に寄贈保管されているというが、手簿や野帳といった技術を知るものは少ないようである。

地図類は、「松代封内測量図」全11図の控えと思われる7図と「松代封内測量図記」が現存する。同図の保存状態は良く、平地部はもちろんのこと山岳地の稜線が明瞭に表現されている。平地・水部・山岳の色彩バランス、里山と奥山、谷部と山頂部などに色彩の変化が見られ、豊かで美しい地図と感じさせるものがある。

一部には測線状のものが記入されており、頂点には「黄、宇、宙、洪、藩、日、月、父、若、天、地・・・」といった測点名と思われる文字が見える。



「松代封内測量図」信濃教育博物館所蔵



「松代封内測量図」部分



「道程測量車」真田宝物館所蔵

測量機器については、忠敬の測量機器を製作した江戸の大野規周の銘が刻まれた「小方儀」のほかは、製図器具が若干残されている程度で特筆できるものはない。

関連して、松代藩の所蔵物を保管展示する「真田宝物

館」には、いくらかの測量機器が残されている中で、径42cmの単車を持つ「道程測量車」（長さ117.7cm、幅22.7cm）が特徴的だが、東福寺がこれを使用したとの確証はない。

「松代封内測量図」を作製したのちの東福寺は、同郷の佐久間象山に従い、沿海の測量に従事したといわれる。当時佐久間象山は、松代藩主真田幸貫が老中に抜擢されたことを受けて海防顧問となっており、砲台の築造を含む海防八策を提言していた。沿海測量に従事が事実だとすると、山国から出て、陸と海の地図作製に当たったことになる。

明治維新後は地租改正の土地の測量に従事し、さらに教育の面でも大きな貢献をしたという。

## 各地の領土綱引き



### その1 長野県旧南信濃村と静岡県旧水窪町

長野県飯田市（旧南信濃町）と静岡県浜松市（旧水窪町）とは、かつて塩の道の難所青崩峠で結ばれていた。

かつて、古道で結ばれた二つの町は、交易は当然のこと住民同士の交流も盛んで、婚姻関係も多くあった。しかし、目に見えない行政界や交通体系の変化によって、以前のような交流が途絶えた。

こうした過去を思い起こすようにと、毎年10月に県境のヒョー越峠で「峠の国盗り綱引き合戦」が計画された。

領土を賭けた若者達の戦いは、両商工会青年部主催で激しい熱気のもとに行われる。ルールは、勝った方が一年間のあいだ領土を1m広げるのだという。平成9年までの戦績は水窪町の4勝7負である。



### その2 静岡県旧相良町と（旧）浜岡町

静岡県牧之原市（旧相良町）と御前崎市（旧浜岡町）は、両町境にある箴川（おさがわ）にかかる郡界橋において綱引き合戦をしている。今年（2000年）までの成績は、1勝ち1負5分であるとのこと。

### その3 山形県遊佐町と秋田県旧象潟町



こちら山形県飽海郡遊佐町と秋田県にかほ市（旧郡象潟町）の「三崎山国盗り合戦」は、毎年10月に両町にまたがる県境で、国土地理院の立ち会いのもと、男30人、女20人による綱引きが行われる。綱引きは、鳥海山開山の伝説に登場する三本足のカラスにちなんで、三本の綱を引いて行われ、勝者には3本の矢によりの的を射る権利が与えられ、その得点によって、領土を広げるのがルールだという。

その際、勝者には立会人となっている、国土地理院長による「認定書」が交付される。

合戦は、古戦場跡である象潟町三崎山を会場として、今年（2000年）までに8回行われ、過去7回の結果は象潟町の4勝3負。それによって、象潟町は領土を0.9m広げたという。本年は、遊佐町が勝利したが、3本の矢が的を外れたことから領土の変更はなかった。

断るまでもないことだが、いずれも「遊び」であるから、国土地理院の地図は訂正されないし、面積に応じた地方交付税も変更されない。念のため。



## 吉田東伍の生家と吉田東伍墓碑

(吉田東伍の生家：阿賀野市保田1, 725)

(吉田東伍墓碑：新潟市新津秋葉1-9-1 正法寺)

(吉田東伍終焉の地碑：千葉県銚子市清水町2, 840 海静寺)



吉田東伍

(「吉田東伍記念博物館」パンフレットより)

吉田東伍（よしだとうご 1864-1918）は、越後国保田町（現在の新潟県安田町）の旗野家の三男として生まれ、小学校を卒業、続いて新潟英語学校で学び、明治16年（1883）年に教員試験に合格し教員をしていたが、その後現新津市の吉田家の養子となる。

子供の頃から読書好きで、父母から「人間は何よりも衣食が先だ」と注意されたほどであったといわれ、17歳の頃にはすでに地理や歴史の研究を始め、「安田志料」と題する郷土史の執筆を始めていた。「落後生」などの名で投稿を重ね、認められ、読売新聞に「徳川政教考」を連載、日清戦争のとき従軍して「日韓古史断」を執筆してその地位を固めた。

明治28年（1895）日本には統一した地誌がないことに着目し、生涯の仕事として日本の地名辞書の編纂を決意した。それから13年間、粉骨砕身の研究・執筆を続け明治40年（1907）「大日本地名辞書」を完成した。同辞書の完成祝賀会は、上野精養軒で開かれたが、大隈重信、前島密など名士・文化人 150名が参加する盛大なもので、参会者は会場に積み上げられた原稿用紙の山に驚愕したという。

同辞書は、文字数 1,200万字の巨編で、ほぼ一世紀を経た現在も版を重ねている。その他に「日本読史地図」や、今風に言えば逆読み日本史にあたる「倒叙日本史」さらには、「海の歴史」、「利根川治水論考」、「日本歴史地理之研究」など今日的問題を提起した著作を数多

く残している。生涯彼が執筆した書籍・論文は、非常に多く31年間の執筆活動の間、一月に1編の割合で発表していた。



吉田東伍生家

生家は、越後から会津への街道に面した保田の中心部に、一部改装されているが現存している。また、同地に平成 9年 9月に「吉田東伍記念博物館」がオープンした。同館には、東伍の偉業を知る原稿や書籍のほか、上野での図書館通いを彷彿させる「読書は一種の戦争である、図録は戦場における地図である、読むと同時に写せ」の言葉と、志願兵時代の鉛筆書きの地図や「想像安田町古城址按図」、「町並古図写し」といった興味深い地図類も展示されている。

1918年療養のため滞在した、千葉県銚子市の飯沼観音前の旅館で亡くなったため、近くの新津市に東伍終焉の地碑が、新津市の正法寺には墓碑がある。

## 木崎盛政

木崎盛政（きさきもりまさ 1867- 1946）は、「大日本地名辞書」に納められた地図を作成した。

慶応3年（1867）山形藩士木崎龍馬の嫡男として生まれ、同地の師範学校を卒業、教員、校長を経て創設間もない陸地測量部に入り、修技所の学生を終えた後、三角科を志望したが、地図作成の腕が優秀であったため製図科に配属された。不満であった木崎は、勤務を怠り、ついに明治27年懲戒免官となったという。

これを機会に民間での地図作成に従事し、同辞書のほか、日本で最初の近代的地図帳「ふざんぼう最新日本地図」（1889）、日本で最初の1冊ものの百科事典「日本家庭百科語彙」（明治39年1906）及び「大日本地名辞書」（吉田東伍著 1907）などに納められた地図のほか、教科書地図、掛図など多くの民間地図の作成にあたった。

大正期には文部省嘱託となり、国定教科書の製図を担当した。次弟、末弟とも地図製図に従事し、地図製作者一家となる。



## 永明寺山日食観測記念碑

(新潟県三条市東大崎 大崎山公園 市指定文化財)



永明寺山日食観測記念碑

明治20年(1887)8月19日、この時新潟県から茨城県にかけて皆既日食が予想され、のちに初代中央気象台長になる荒井郁之助(あらいいくのすけ 1836-1909)、東京気象学会を設立し会長となる正戸豹之助(しょうどひょうのすけ? 1855-1938)、そして陸地測量部に転じる杉山正治らからなる、内務省地理局の一隊が、ここ永明寺山で観測に成功した。

ここで、接触時刻観測とコロナ観測などが成功し、これをもって日本の近代的日食観測が本格的に開始されたこととなる。

荒井らは、アメリカや海軍水路部などの他の観測隊が東部に集中して観測しようとしていることに注目して、太陽高度の高さなどを考慮し、この地を選定し観測に成功したという。その結果得られたコロナの拡大写真は、翌年のイギリス天文協会誌に掲載され、文部省の伊沢がスケッチしたコロナは、「ネイチャー」にも紹介された。荒井は8月25日に明治天皇を初め皇族方にも報告演説をおこなった。

永明寺山頂には、明治20年(1888年)に建立された日食観測記念碑(裏面には、内務省地理局と刻まれている観測日食碑)がある。この碑の建立に当たっては、当時県会議員であった関谷孝治郎氏の助力大であるが、氏は観測のため山上でテント生活を送る技術者に、米味噌、醤油、野菜などの援助をするなど、日食観測に理解を示したという。

観測を担当した荒井は、開拓使における海と陸の測量、内務省地理局での経度観測・標準時の制定及び中央気象

台での気象観測など、幅広い分野で幾多の活躍をし、明治24年に退官した。主な著作に「地理論略」、「測量沿革草」、「日本ノ地学経度」があり、当地で次の歌を残している。

「はなやかに雲を残して西山に入る日すぎしき日ぐらしのこえ」(→荒井郁之助の墓)

## 杉山正治

日食観測を担当した杉山(すぎやままさはる 1859-1923)は、明治20年当時内務省に属していたが、明治21年の陸地測量部の発足とともに陸軍に転じたと思われる。

杉山の陸地測量部での経歴を「陸地測量部沿革誌」から拾ってみると、明治22年三角科の班員で陸地測量手、同年7月 修技所の高等学生となり、同24年7月卒業、同年8月測量師となる。

明治33年 2月測地学委員会委員となり、同36年から39年までの間、ドイツのポツダム測地学研究所に留学した。

留学中に、明治39年三角測量の誤差配分に関して意見を述べ、帰国後直ちに諸外国の測地測量の状況と、本邦の測量事業の有るべき方向について報告した。その後、三角科第一班々長となり、「離島における三角測量の実行法」、「三角測量方式改正草案」の作成、修技所教科書の編纂などに携わり大正7年5月に退官した。

留学中に同僚に書き送った手紙には、「……独逸語がどうやら話せる様になりたる位に不過候けれどもこれから洋行する人は第一に外国語を十分に熟達して置くを必要と存候間諸君にも御在京中は夜業に外国語学校へ御通学の程希望候……」と再三語学について勉強するようにと書き送っている。

また、当時の陸地測量部職員の研究報告などを掲載した雑誌「測図研究会記事」や「三五会会報」には、毎号のように杉山の研究報告や諸外国の測量事情紹介があり、測地学委員会と東京地学協会でも活動するなど、矢島守一とともに創業期の陸地測量部において、基線測量や三角測量の技術だけでなく、あらゆる面で技術者の模範となって活躍したひとりである。

墓碑は東京青山墓地1種イ13号-4-4にある。(→矢島守一)

## 松田伝十郎の父母の墓と樺太 発見の碑

(松田伝十郎父母の墓：新潟県柏崎市米山町2, 260 蓮光院)

(樺太発見の碑：新潟県柏崎市米山 聖ヶ崎)

松田伝十郎(まつだでんじゅうろう 1769-1842)は、越後の貧農の家に生まれ、同地の道路工事を監督していた幕臣大西栄八郎にその才を見込まれ、彼とともに江戸に向かった。この間の経緯は、なぜか間宮林蔵のそれとよく似ている。

江戸で武士としての修行を重ねた後、大西の同僚の松田伝十郎の養子となり、初めは仁三郎を名乗った。そして文化 5年(1808)には伝十郎を継いだ。

寛政11年(1799)からの幕府の蝦夷地直轄に際して蝦夷勤務を志願し、文政 5年(1822) 蝦夷地が松前藩領となるまで幕府御用掛として樺太探検と蝦夷地経営に従事した。

文化 5年には、松前奉行支配下役元締めとなり、宗谷勤務の時、林蔵とともに樺太を探検した。4月13日に宗谷を出航し樺太白主に着き、二手に分かれて調査し、島であればどこかで落ち合うことで「樺太」が島であることを確認しようとした。

伝十郎は西海岸を、林蔵は東海岸を小船で北上したが、林蔵はシレット岬で北上を断念し西海岸へ出て松田と再会した。伝十郎はそれより北ラッカ岬まで行き、この時の現地の状況と住民からの事情聴取で、北に行くほど海が狭くなり、更に北では浅瀬になり、潮の流れも強いことから島であることがほぼ間違いないと確信していた。

林蔵も松田とともに再調査した結果から、同様な意見を持っていたという。

伝十郎は同年10月江戸に帰り、樺太見聞の実測図を幕府に提出した。林蔵は翌文化 6年(1809)に再度渡樺し、沿海州までおもむき「樺太」が島であることを発見する。

伝十郎が確信した海峡が、間宮海峡とされたことについて、伝十郎を思う人たちは、功名心の強い林蔵が、探検隊長を差し置いて自ら幕府役人高橋景保に報告したからだといっている。いずれにしても、地元米山町の人々は「カラフトは離島なり、大日本国境と見きわめたり」と刻んだ「樺太発見の碑」を建立し(1972) 松田の

カラフト探検を称えている。

文政 5年(1822) 伝十郎は、永年その経営に携わってきた蝦夷と樺太が松前藩の管理となったことで、江戸に帰ることになり、その時の無念の心境を次のように詠んでいるのだが、この間の林蔵とのことがオーバーラップするようである。

「骨折し24年の粟餅を 黄粉くるめて鷹に取らる」

その後、北方勤務の経験から得た蝦夷と樺太の自然・風俗・異国船の来航・幕府の対策などを記録した「北夷談」を著した。伝十郎が江戸にいた文政 6年(1823)に、郷里現柏崎市米山町の蓮光院に建てた父母の墓があり、施主江都松田傳重郎とある。

文政14年(1842)に74歳で亡くなり、駒込の吉祥寺の喜蔵庵に葬られたというが、墓碑の有無については未確認である。(→間宮林蔵記念館)



「樺太島図」

(間宮林蔵・松田伝十郎 市立函館図書館蔵)



出雲崎妙福寺境内の経緯度天測標と  
浜田測候所の天測標など

(経緯度天測標: 三島郡出雲崎町岩舟町1, 592 妙福寺)  
(浜田市大辻町235-3 旧浜田測候所 0855-22-1970)  
(佐賀県唐津市鎮西町馬渡島)



経緯度天測標

旧海軍の水路部は、海図作成のため、明治 9年の静岡と青森を初めとして、全国各地の 100余の海岸地域で経緯度測定を実施したという。新潟県出雲崎には明治11年、すでに電信局が設置されていたことから、明治21年 7月に行われた経度測定は、電信を利用した方法によって行われた。その結果は、東経9h14m3.9s、北緯37度32分30秒であった。

出雲崎町は「良寛の里」、北前船が寄港した風情を残す妻入りの町並みの町として知られている。この町の日本海を望む高台、妙福寺の境内には 1 辺20cmほどの直方体の経緯度測定の跡を示す標石が現存している。

標石上部には十字が、側面にはそれぞれ「経緯度測定標」、「水路部」、「明治廿一年八月」の文字が刻まれている。

標石は、貴重なものとして大切に保存されてきたが、その位置は設置時から多少移動したようで、境内の崖縁に追いやられて、やや傾きかげんで大木の枝に抱かれるように海を見下している。

また、石段を降りた左手にある芭蕉公園には、「北陸街道人物往来史」の看板があり、「享和 2年 (1802) 伊能忠敬海岸を測量に来る」の記入がある。伊能忠敬の測量隊は、享和 2年9月29日寺泊から入り10月1日に柏崎へと進んだ。さらに翌年には富山、糸魚川方向から出雲崎に入り、佐渡の小木に渡ったことが「測量日記」に記さ

れている。

さて、同様な直方体の天測標であるが、秋田市千秋（「緯度測量点」「水路部」「大正七年五月」とある）、佐賀県唐津市馬渡島（「緯度測定標」「水路部」「明治廿二年六月」とある）、吉崎市郷ノ浦町永田触（吉崎島・岳ノ辻）（「緯度測定標」「水路部」「明治廿二年三月」とある）、北海道小樽市（「水路部」、「明治二六年一〇月」）にも現存しているというが未調査である。

また、島根県浜田市大辻町の旧浜田測候所構内にも、変わった天測標が保存されていた。こちらは、大正 9年 (1920) に天測によって経緯度を測定したもので、緯度はタルコット法、経度は子午線経過観測法が使用されたが、すでにこの時点までには、出雲崎と同様な電信を利用した方法で、正確な経度が知られていたという。

標石であるが、コンクリート製のテーブル状で、高さが50cm、テーブルの直径は97cmほどであり、その周囲には「大正九年十月経緯度口水路部測定者中野徳郎」と刻まれている。中野は、この標石をどのように利用したのだろうか。



旧浜田測候所の天測標 (松村巧氏撮影)



佐賀県唐津市馬渡島の天測標 (舘沢省吾氏撮影)

旧測候所の官署履歴にも、観測の事実についての記述



があるというが、これ以上のことは明らかではない。

時期からして、旧浜田測候所の天測標は、実施された約 100点の天測標の最後を飾るものではないかと思われる、それを記念して中野氏はモニュメントとして氏名を刻んだのではと推測されている。

いずれも、測地学・天文学史上貴重な史跡の一つであり、今後も大切に保存されることを願いたい（浜田測候所のそれは、その後撤去され不明である）。（→経緯度基点銅板碑→日本経緯度原点）

中野徳郎

浜田で経緯度測定をした中野徳郎（なかのとくろう 1874-1932）は、佐賀県に生まれ、東京帝国大学星学科を卒業し、その年に創設された水沢の緯度観測所に入所し、Z項の発見で有名な木村栄の緯度観測に参加した。

その後（明治40年 1907）海軍水路部に移り、東京グアム間（大正 4年）、東京ウラジオ間（大正 5年）などの無線電信による経度測定に従事し、旧値と10秒4 の差がある現在の日本経緯度原点の経度値を測定した。

さらに、出雲崎や浜田のような海図作製のための各地の経緯度測定に従事することになり、大正10年（1921）には水路部第四課長となった。

この間、測地学委員会委員を勤め、明治40年のロンドンで開かれた万国測地学会にも出席した。

佐渡が生んだ

## 地理学者柴田収蔵の墓

(新潟県佐渡市宿根木468 称光寺)



柴田収蔵自画像

(「柴田収蔵日記」東洋文庫より)

柴田収蔵(しばたしゅうぞう 1820-1859)は、文政3年(1820)佐渡宿根木の四十物師(あいのし:魚・干物加工業)で名主の長五郎の子として生まれた。小さいときから読書が好きで、書や図書を写すことを好んでしたといい、15歳の時から当地の石井夏海に絵画と篆刻を学んだ。

佐渡奉行所の地方(じかた)付絵図師であった石井夏海(1783-1848)は、江戸に出て司馬江漢から西洋式の測量術を学び、そのころ伊能忠敬の作成した「佐渡実測図」の修正を命じられていた。

石井に腕を見込まれた柴田は、すすめられて天保10年(1839)19歳の時に江戸に出て、優れた地図技術者を目指して篆刻を学び、帰郷後も石井夏海・文海父子の仕事を手伝った。そして天保13年、忠敬の図が訂正され「佐渡一国山水図」として完成した。

収蔵は、石井氏のもとで地図作成を手伝いながら、師が所蔵する「三国通覧」「伊能図」「蝦夷之全図」「天経或門」などの多くの地図と地理・天文書にふれたが、翌年再び江戸に出た収蔵は、なぜか異なる道を目指す。

シーボルトに学んだ蘭学者伊東玄朴に師事し、医学・蘭学をおさめたのである。

当時は庶民の子が医者になることは名誉であり、高い収入が保証されていたからだろうか。ところが彼は、医学を学ぶ傍らで幕府天文方山路諧孝に測量・地図作成を学んで帰郷した。その後、故郷宿根木の称光寺末寺で医

業を開いたものの(1845年)、地理や地図に対する魅力に勝てず、「万国全図」の製作に没頭する。

そして、自らが製作したこの楕円の地球図「改正地球万国全図、地球万国山海輿地全図説」(1848年)をひっさげて、三度目の江戸遊学を果たした(嘉永3年 1850)。師となる古賀謹一郎に同図の評を請うと同時に、こんどこそ念願の?地理学の指導を受けた。

師の古賀が幕府洋学所頭取に就くと、絵図調出役に採用された(安政2年 1855)。佐渡宿根木の商家の子が無類の出世をしたことになる。



柴田収蔵作の「新訂坤輿略全図」(部分)  
新潟市浄光寺蔵(「日本地名大百科」小学館より)



柴田収蔵の墓

収蔵が作成した地図は、この「改正地球万国全図、地球万国山海輿地全図説」のほか、改称された蕃所調所で手がけた「蝦夷接壤全図」、「重訂万国全図」、1852年に出版した「新訂坤輿略全図」がある。「新訂坤輿略全図」には、島となった樺太のほか、アルジェリアのフランス領編入、ボストンやニューヨークの記入など最新の情報が盛りられ、彼の研究の確かさを知ることができる。

彼の性格や考え方が分かる行動として、次のようなことが伝えられている。蘭学者でありながら儒学を否定し

ない。野山で薬草をとっては漢方薬を製しながらも、不足分は西洋医薬で補い、医学を学びながらも、より以上にこれに興味を示すことなく、一転して得意とした地図作製の道に進んでいる。このように弾力的な思考を持ち、多彩かつ奔放であると同時に、仔細な日記を残す几帳面な一面も見える。

日記には、連夜のように「酒を飲す」と「『日本図』を写す」の文字が見え、そこには酒びたりだけではない、熱心に地図作成にあたる収蔵がある。

幕末に佐渡が生んだ異色の地理学者である。

1859年、長年の大酒がたたったのか蕃所調所の在職中に39歳で亡くなった。

墓は郷里の佐渡宿根木の称光寺にある。生まれ育った宿根木は、かつて佐渡の富の三分の一を集めたと言われるほど栄えた地で、現在は「千石船の里」として重要伝統的建造物群保存地区に指定され、建物の質素で特徴的な板戸、天井、柱、そして入り江に続く小さな谷間に寄り添う独特の町並みが良く保存されている。

称光寺は、千石船が帰りがけに荷とした御影石で作ったという念仏橋を渡った集落の最奥にある。収蔵の墓は、信心深い宿根木の人々の献花が絶えることがなく、古色蒼然の中にも明るさのある本堂裏手墓地、ほぼ中央にある。



高樹文庫（石黒信由遺物文庫）と射水市新湊博物館

（高樹文庫（石黒信由遺物文庫）：富山県射水市高木246 国指定重要文化財）

（射水市新湊博物館：富山県射水市鏡宮299 0766-83-0800）



石黒信由  
（「新湊市博物館」パンフレットより）

石黒信由（いしぐろのぶよし 1760-1836）は、宝暦10年（1760）越中国高木村（現射水市高木）の肝煎を勤める豪農の家に生まれ、幼名を与十郎といった。早くに父を亡くしたが祖父に育てられ、幼いときから算学に興味を持ち、22歳の時富山の中田高寛に師事し、関流和算を学んだ。

その後、宮井安泰に測量術を西村太沖に暦学などを学び、寛政7年（1795）以降に検地などの御用を努め、その後は加賀藩の命を受け、新田開発や用水事業の測量に従事した。

信由は新田開発のため、高低差の少ないところで用水を引くことで工夫が必要になり、人足にガンドウと呼ばれる回転するろうそく立てを持たせて、測量したという。これは笠測量と呼ばれた。

伊能忠敬とは享和3年（1803）8月3・4日に放生津（射水市）で接見し、その際忠敬の使用する測量機器に興味を示したという。このことが、信由のその後の測量などに大きな影響を与えたといわれる。

信由が本格的な測量と地図作成に従事したのは、数え年60歳（文政2年 1819年）になってからである。

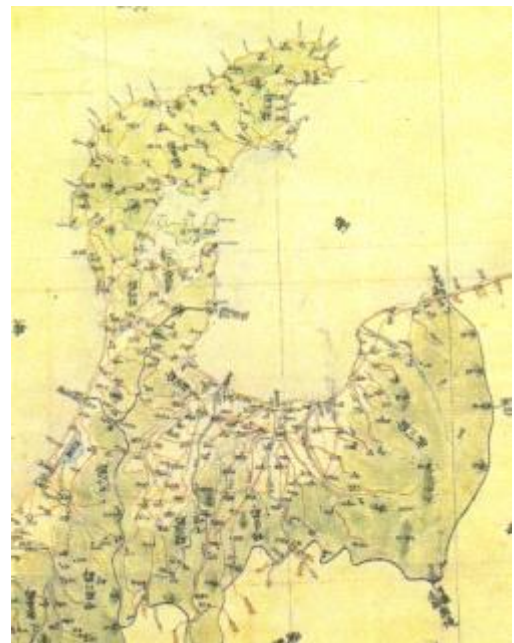
これ以降は、それまでの実績が認められ加越能三州の測量に従事し、「加越能三州郡分略絵図」などを作成した。

信由の残した地図は、内陸部を含む実測図が多く、極めて精度の高いもので、忠敬の日本全図と並ぶものである。著書も多数残しており「増補大路水径」は労作といわれている。

信由の孫信元、その曾孫信基も志を継いで算学・測量に功績を残し、門人も測量・新田開発の職に就いた。

生家の一隅にある高樹文庫には、信由の作った地図や象限儀などの測量機器など、石黒家の学問の足跡を残す1万2千点が残されていたが、平成10年（1998）秋に「道の駅」に併設して射水市新湊博物館が開館し、信由の遺物もここに移された。

同館には、信由の使用した測量機器と作製した地図が展示されているほか、楽しく測量が体験できる測量庭園がある。（→西村太沖の碑→伊能忠敬記念館）



「加越能三州郡分略絵図」（石黒信由 高樹文庫蔵）

## 西村太沖の碑

(富山県南砺市城端町野下1, 669 城端神明社境内)



西村太沖像

西村太沖(にしむらたちゅう 1767-1835)は、明和4年(1767)に富山県城端町の素封家蓑谷屋長兵衛の子として生まれた。

幼いころから学業を好んだ太沖は、16歳で京都に上り、医業の修行に励み、その傍ら暦学を学んだ。師は西村遠里(にしむらとおさと ?-1787)で、師の他界後西村家を継ぐものがいなかったので推されてこれをついだ。

その後大阪に出て、寛政元年(1789)当時暦学で名高い麻田剛立の門に入り、数年間暦学、数学などを学んだ。

故郷に帰った太沖は、当初(1799年)加賀藩に使える藩校の明倫堂において天文学などを講義したが、まもなくこれを辞し、故郷の城端町に戻り、医業を営みながら20年間ほど天体観測などを続けた。

文政4年(1821)再び請われて、加賀藩に仕え、翌年から金沢城下の測量を行い地図の作成にあたり、暦政に従事した。この間の研究成果を整理し、八十巻を越える書籍を著したといわれ、これらの研生活によって財産を使い果たし、清貧な生活をおくっていたという。

昭和9年、城端町の城端神明社境内に木村栄博士の書による碑が建立された。城端町には、西村太沖宅跡がある。

天保6年(1835)に亡くなった太沖の墓は、金沢市野田町の野田山墓地にあり、碑面には「得一館西村先生墓碑名併所」とある。(→麻田剛立の墓→高樹文庫→木村栄博士の生家跡)



西村太沖の碑

## 西村遠里

西村太沖の師であった西村遠里(にしむらとおさと ?-1787)は、京の人で近藤遠里ともいった。

宝暦改暦の時、召されて京都の土御門泰邦の配下の助手となり、事業に従事した。数学・暦学にも達し、天文学に専念した。宝暦13年(1763)には官暦に日食のことが記されていないことを指摘したが受け入れられなかったが、指摘した当日には日食があったという。

著書に「本朝元文法」、「天文指要」、「歴象の弁」がある。天明7年に没したが、門人達は、相諮って蓑谷(西村)太沖を推して跡を継がせたという。

富山県立山博物館（柴崎芳太郎発見の  
劔岳錫杖所蔵）

（富山県立山博物館：富山県中新川郡立山町芦峯寺93-1 0764-81-1216）



柴崎芳太郎

柴崎芳太郎（しばさきよしとろう ?-?) は、かつて「地獄の針の山、登ってはならない山、登ることのできない山」といわれていた越中劔岳に、明治40年 7月13日、陸地測量部として、初めて登頂に成功した測量官である。

一般人に柴崎芳太郎を紹介することになったのは、新田次郎著作の「劔岳・点の記」である。私たちは、陸地測量部の測量師や測量手が長期間、家族と別れ人里離れた立山周辺で、天幕生活を送りながら測量する姿が小説化されたことに、後輩として大いに勇気づけられたものである。

また出張に際して、準備をする柴崎に「妻の葉津よが手を貸そうにも貸す余地がなかった。」の件などに変に共感したものであった。

今更ではあるが、小説の概略を紹介すると。

「創設間もない『日本山岳会』が、未踏峰の劔岳の登頂を目指していることを知り、陸地測量部は密かに、同会に先を越されまいと対策をねる。

陸地測量部長大久保徳明と三角科長樋口誠三郎は、修技所を終え入所三年目、新進気鋭の柴崎測量手をその任に当たらせることにする。しかし幹部は、あくまでも測量の過程での登頂であって、山岳会に勝てと指示したわけではなかった。

柴崎らは、山岳信仰の篤い立山村芦峯寺での住民の抵抗、ルート開拓や悪天候などの困難を乗り越え登頂を

果たすが、山頂付近には、「錫杖の一部と剣」が残されており、「弘法大師が草鞋千足を用いても登れなかった」と信じられてきた山には、既に登頂者がいたことが明らかになった。

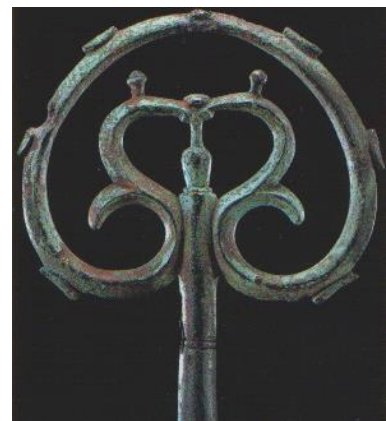
この報告に陸地測量部では、当初の意気込みは失われ、千年前に登れた山に、誇りある陸地測量部が今のいまままで登ることができず、地図の空白を作っていたことと考え合わせ、柴崎に慎重な行動を指示する。

この間に、立山温泉での宿泊をめぐる富山県職員との諍いなどがあり、それを含めた登頂に関して、地元新聞社の取材を受け、詳細が記事となった。

急峻な山岳地での柴崎隊の測量は、一定の成果を上げたにも係わらず、正しい評価を得られなかった。しかし、柴崎の胸には、測量隊のチームワークによって仕事を成し遂げたことの清涼感だけがあった。明治40年のことである。」

柴崎は、明治36年に65倍の難関を突破し、15名の同期生とともに修技所と呼ばれる技術者の養成所で教育を受け、同37年12月に卒業し測量手として、三角科第四班の三、四等三角測量担当に配属された。

劔岳の測量に従事した、明治40年の編成表を見ると、第四班は駒井・井上両工兵大佐の下に13人の測量手と6人の雇いと呼ばれる職員が配置されている。この年の測量は、能登、越中、越後が実施され四月中旬から十月下旬まで外業に出かけていることが記載されている。



劔岳で発見した錫杖

柴崎は、劔岳測量に関して、2編の文章を残している。当時の陸地測量部の部内広報誌ともいえる「三五會々報」の第21号（明治41年 3月）の「出張地ニ於ケル見聞ニ就テ」と、同第33号（明治42年 4月）の「劔（マ）山ニテ獲タル錫杖ニ就テノ考証」である。

前者の内容は、劔岳登山について数回の登山の失敗の



末、死を賭けて登山を試みたこと、錫杖を発見したこと、記者の取材を受けたことについて細かに書かれている。

続いて、二点について特に言っておきたいとの断わりのあと、記者の取材を受けたが、若輩のため真意を伝えられなかったこと、立山温泉で冷遇を受けた原因は自分の経済上の理由からではなく、県職員という相手があったことと記述している。

後者は、表題のとおり錫杖とはどのようなものか、その後の鑑定の状況などについて、発見を機会に学んだことを記述している。

彼は、明治39年に福井県吉野郡吉野村（当時）の山中で石棺も発見しており、二度にわたって測量中に貴重な文化財などの発見に遭遇した不思議な縁の持ち主である。

その後も柴崎は、三・四等三角測量を中心に千島や満州、中国にも出かけ黙々と測量に従事した。小説にあるとおり、柴崎は僧侶や修験者が使ったと思われる、綺麗な緑青色をした錫杖の上部の金属部分と、槍身を発見し持ち帰った。



富山県立山博物館

（「富山県立山博物館」パンフレットより）

この錫杖（「銅錫杖頭」、「鉄剣」いずれも重要文化財）は、小説や新聞記事によって多少誇張されたきらいがある富山県職員との諍いという恩讐を越えて、富山県立山博物館に展示され、測量師の苦節を今に伝えている。

（→測量教育百年記念碑→館潔彦の墓→一等三角点）

## 遠近道印ゆかりのお菓子

(富山県高岡市末広町2-4及び、富山県富山市鹿島1-1-6 不破福寿堂)

遠近道印(おちちどういん)をご存じだろうか。

その道に詳しい人なら、「東海道分間絵図」を道線法などを利用して作成した人として、知ってのことであろう。

絵図師道印は、富山藩お抱えの藩医であり、江戸のガイドブック「江戸雀」を執筆し、有名な蹴鞠師でもあった、藤井半知(1628-?)という御仁ではないかといわれている。

道印は図翁とよばれ、明暦の測量図から作成した初めての正確な出版江戸図「江戸分間図」や、道中絵巻物を思わせる菱川師宣の道中風俗画を書き加えた「東海道分間絵図」を作成した。

道印作成の絵図は磁針などによる道線法や交會法を用いた正確なものであり、実用的でもある。その結果、忠敬以前のもっとも優れた地図作成者として、彼の名を上げるものもある。

生涯独身を通したと思われる多才な男である道印の横顔は、ペンネームを使うなど自ら霧中におこうとする気配すら感じられる。

本名はなんといったのか、測量術はどこで取得したのか、妻子はいたのか、いつ生まれ、いつ亡くなったのか墓の存在すら明らかでない。

さて、この測量方がお菓子となって、その偉業とともにふるさとに伝えられていることをご存じだろうか。地図・測量を生業とするものの端くれとし、このゆかりのお菓子をすこしでも応援してあげよう。



鹿子餅と包み紙

道印ゆかりのお菓子は、とろけるような柔らかな白い肌の餅に、甘納豆になった大粒の豆が鹿の子模様に配されている。これが現在の「鹿の子餅」である。

このユニークな菓子がどうして道印に関係するかというと、大正2年に出した鹿の子餅の口上書には「道印が故郷に錦を飾ったことを記念して、富山寺のお堂のそばに植樹をし、餅をついて祝ったといい、そのことを後の世まで伝えるためこの鹿の子餅を売り広めた」と記されていたという。

菓子は富山市の菓子屋「高木花月堂」が販売していたが、その店は戦前にはなくなったといい(「図翁 遠近道印」深井甚三著 現在は不破福寿堂が販売している)、当時の鹿の子餅がどんな姿であったかは知らない。

道印が富山の人であることさえ不明である現在、この口上書が彼の素性に迫る重要な鍵を握るなど謎を秘めている。鹿の子餅は分間絵図の風景を思い浮かべるにふさわしい美しさであり、発想の豊かさを感じさせる膨らみと柔らかさがある。



「東海道分間絵図」

(「東海道分間絵図」中央公論出版社より)

## 十二貫野用水の設計者椎名道三 の墓

(十二貫野用水碑：富山県黒部市本野)

(椎名道三の墓：富山県滑川市田林)



椎名道三肖像

明治期以前の各地の測量技術者を紹介しようとすると、そのほとんどが新田開発者ということになる。越中の椎名道三（しいなどうざん 1790-1858）も、ご多分に漏れず土木技術者であり、新田開発功労者である。

新川郡小林村（現滑川市）の十村役宝田宗三郎の三男として生まれた道三は、養子に出され貧しい山村（現魚津市松倉村大熊）に育つ中で、測量・土木など身につけた、土木技術者としての道に進むことになる。

13歳の時には、谷川の水を引いて20aほどの、16歳の時には4.5haの開田をして村人を驚かせたという。その後も、東福寺野、十二貫野、舟倉野などでの用水開削、加賀藩の依頼による加賀・能登の用水開削を担当した。

特に十二貫野は黒部川と布施川に挟まれた台地であり、この地へ引水するには、相当の技術と多額の資金を必要とした。天保8年（1837）加賀藩から新田開発主附に命じられた道三は、測量調査の後、天保10年5月に工事に着手し、同12年9月には完成した。約24kmに及ぶ水路工事の谷越えには、石管を用いた導水管で谷を越えるサイホンの原理を用いた。

48歳の時（1838）には、新田裁許・測量方新田勢子役に命ぜられた。長い肩書きはともかく、次第にこれまでの功績が認められつつあった。

残された道三の測量器具は、コンパス、方円分度器、大方儀、磁石盤などが残されており、三角法や三角関数が用いられたと推測されるが、この高等な測量術をどの

ようにして学んだかは明らかになっていない。

当時の越中には、現在の富山市水橋には伊能忠敬とも交流があり、忠敬も超える技術を持っていた石黒信由、幕府天文方山路主任の門人であった算学の富山藩士中田高寛、天文学の西村太沖らの師がいた。道三は、養子に出されたとはいえ、小村の指導者である十村役の出であったことから、何らかのつながりで彼らの学問や技術を習得する機会に恵まれたのかもしれない。

道三が生涯に開田した面積は、1200haにものぼり、現在でも黒部の人々は、道三の導いた水の恩恵を忘れることなく、これを引き継いでいる。富山市立博物館には、道三が十二貫野用水の工事で使ったとされる望遠鏡のついた大方儀（だいほうぎ）や磁石盤などの測量器が保管されている。（→西村太沖の碑、→高樹文庫〈石黒信由遺物文庫〉）



木村栄博士の生家跡と木村栄博士の  
胸像、ふるさと偉人館

(木村栄博士の生家跡 標柱：金沢市泉野町3-18-16  
笹の湯)

(木村栄博士の胸像：金沢市出羽町2-1 広坂園地)

(ふるさと偉人館：金沢市本多町6-18-4 0762-20-247  
4)



木村栄

(「ふるさと偉人館」パンフレットより)

木村栄博士(きむらひさし 1870- 1943)は、明治3年9月に石川郡泉野村(現在の金沢市泉野町)の篠木家に生まれた。その後、分家の木村家の養子となり、東京帝国大学を卒業し、水沢緯度観測所の初代所長となり、約42年間地球回転運動の乱れの一つである極運動の研究を行い、その学問的基礎を築いたことで知られている。

特に、国際協力によって世界の各地で緯度観測を実施した時に、観測された緯度変化と極運動の影響の関係が完全に一致しなかったことから、1902年に「緯度変化＝極運動の影響＋正体不明の影響(Z)」の式を考えだし、これにより、世界中の観測値がよく揃うようになった。

いわゆる「Z項の発見」で、世界中の注目を集めた。

昭和45年国際天文学連合は、これまでの木村の功績を称え、月の東経115度、南緯52度にある噴火口を「キムラ」と命名した。

篠木家(現笹の湯)の前には「木村栄博士、生誕の家」と刻まれた石柱がある。

胸像は兼六園に近い広坂園地にあり、同様のものが金沢市緑ヶ丘の泉野小学校の校庭、十一屋小学校(十一屋町3-45)にもある。



ふるさと偉人館

(「ふるさと偉人館」パンフレットより)

また、金沢から輩出した五人の偉人について紹介する「ふるさと偉人館」でも、仏教学者鈴木大拙、化学者高峰譲吉、国文学者藤岡東圃、思想家・評論家三宅雪嶺らとともに天文学者木村栄の功績について紹介されている。(→木村栄記念館)

## 辰巳用水を開いた板屋兵四郎を祭 る板屋神社

(板屋神社：石川県金沢市袋板屋町口28)

(板屋神社：石川県金沢市上辰巳町13-17)

寛永 9年(1632) 加賀藩三代藩主前田利常は、前年におきた大火を機に金沢城と城下の防火・生活用水の確保を目的に用水工事に着手した。

工事の責任者として、町人の出ではあるが、用水開削や灌漑事業などで実績があり、算盤勘定と測量が得意との評があった能登奥郡の小代官板屋兵四郎(いたやへいしろう ?-1653?)を抜擢した。

工事に着手した板屋は、取水口の選定にあたっては、慎重な踏査測量を実施し、取水地点を石川郡上辰巳村地内の犀川とした。

用水は、取水地点から小立野台地段丘崖に沿って進み、しばらくの間は暗渠とした。その理由は土砂の崩壊や積雪による障害を防止するためであったといわれる。その後は、開渠として兼六園を経て城内に引いた。総延長約10,661m、うち隧道部は約3,298mであった。

測量や工事の記録は少ないが、暗渠の多い工事での微妙な標高差などを考えると、相当精緻な測量を実施したものと考えられる。

取り入れ口から城内までの距離は約10km、標高差はわずか50mである。10m進んでわずか5cmという微妙な傾斜の用水路工事である。

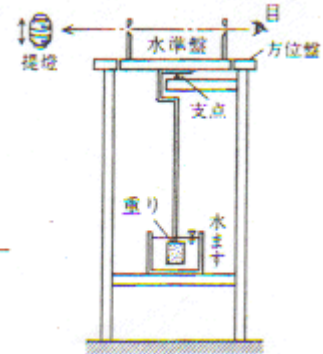
伝えられているところでは、夜間に提灯を上下させて、遠距離地点からこれを観測し、等しい高さの点を求め、さらに各点間の距離を得て、これから水路の勾配に見合った高さを決めて工事を実施したという。この時使用された測量器は、「町見盤」と呼ばれる一種の水準儀によって測定した。

彼は、堀を越えての引水には逆サイホンの原理を使用するなど、測量だけでなく土木工事の面でも優れた技術を用いている。また、辰巳用水に使われた石管の中心線の一致など、その精巧さにも目を見はるものがあるという。その遺物は、道路や水道工事などの市街地開発に際して多数掘出されている。

総延長約10kmの辰巳用水の完成は、わずか1年後のことであった。このように短期間で難工事が完成を見た理由の一つは、全体をいくつかの工区に分け、それぞれに

責任者を当て、兵四郎が全体を差配したからだといわれている。

その背景には、信頼のおける測量成果と綿密な工事設計ができていたからにほかならない。



町見盤の構造



板屋町の板屋神社入り口 (寺林敏之氏撮影)



同板屋神社と石管

(狛犬の下にあるのが石管 寺林敏之氏撮影)

兵四郎のその後はというと、技術の漏洩を防ぐ目的からか、残された資料も少なく、工事完了後に謀殺された

という説があるなど不明な点が多い。

兵四郎の工事事務所にあたるものがあったといわれる河北郡袋村に板屋神社があり、ここには以下のような話が伝えられている。

この地では、謀殺説の翌年に天候不順となり、これは兵四郎の祟りであるとの噂が流れた。そこで、袋村の八幡社に彼の霊を合祀して、袋の神(風を袋に封じ込める)と呼んだという。

上辰巳町にも板屋神社があり、兵四郎を主祭神として昭和35年に創建された。何れの神社にも兵四郎らが辰巳用水で使用した石管が残されている。

さらに、兵四郎の墓として伝承されるものが、金沢市東山 2-18-27の蓮覚寺にあるというが、真偽のほどは定かではない。



## 三国港H測標

(福井県坂井市緑ヶ丘四丁目2-1 みくに龍翔館)  
重要文化財「三国港(旧坂井港)突堤」

福井県の三国港(旧坂井港)突堤は、お雇い外国人であったオランダ人のエッセル(G. A. Escher 1843-1939)が設計し、デ・レーケ(Johannis de Rijke 1842-1913)の監督により着工され、明治13年(1880)に一部を残し竣工した。

彼らは、1873(明治6)年に内務省土木局に招かれて、来日し、淀川修復工事(大阪市)や三国港のエッセル堤、龍翔小学校(現みくに龍翔館)の設計・指導を行った。

特に、デ・レーケは「砂防の父」とも呼ばれ、日本各地の砂防や治山工事にあたり、港湾建築計画を立案した。特に木曾川の下流三川分流を成功させたことは有名である。



(H 測標)

三国港は、粗朶沈床の上に巨石を積み上げて建設した、日本で最初の西洋式工法による「三国港突堤」は、エッセル堤とも呼ばれて、現在重要文化財に指定されている。

「H 測標 明治十一年起工」の刻字がある測量標石は、この工事の関連で使用されたものとして、重要文化財の付指定になっており、三国町緑ヶ丘の郷土博物館「みくに龍翔館」に保存されているが、その詳細は不明である。



## 日本真ん中センター

(岐阜県郡上市美並町白山430-4)



日本真ん中センター

(「日本真ん中センター」パンフレットより)

“日本の中心”は、各地に色々あるが、ここ旧美並村の真ん中は、5年に一度の国勢調査をもとにして決まる人口重心である。従って、何時までも同じ位置にあるわけではなく、1965年には岐阜県的美山町であったが、首都圏への一極集中により、重心は次第に東に移動した。1970年には洞戸村、1975年には美濃市、そして1980年に美並村に位置し、東進しながらも村内に踏みとどまっていた。

美並村は、この「日本の真ん中」を村おこしの材料に活用して、巨大な日時計備えた「日本真ん中センター」を1997年に建設した。日時計の高さは、37.3m(みなみ)、センターには「おもしろ統計コーナー」や「自然環境コーナー」のほか、世界の日時計などが展示されている。

さらに、「日本真ん中」花火大会、同秋祭り、同マラソン大会などを開催しているほか、「へそまんじゅう」、「ど真ん中ラーメン」などを販売するなど、「日本真ん中」を最大限に利用している。更に、センターの周辺を「真ん中の里」として整備してきた。

ところが、人口重心は1970年以降5年に3.3kmから1.3kmのスピードで東進を続けている。その結果、1995年には東隣の武儀町まで約1.5km、南隣の美濃市境まで500mに迫った。

2000年の国勢調査結果では、これまでのペースで移動すると、村内にとどまるかどうかは微妙であったが、更に東南に移動し、新しい人口重心は隣接の武儀町となった(東経136度58分06秒 北緯35度37分01秒)に移動して、

岐阜県武儀郡武儀町、現関市北西部であった。2000年国勢調査)。

2005年国勢調査結果では、さらに東南へ進み、岐阜県関市富之保(東経136度58分56秒、北緯35度36分42秒)である。

ちなみに、人口重心は日本全土を平面と見なし、その上に分布する人口を、市町村役場の上に当該市町村の総人口があると仮定して、重心を求めている。



(平成12年12月3日付 中日新聞より)



## 日本最高所三角点

(富士山：静岡県・山梨県)



日本最高所三角点の碑（「国土地理院広報」より）

富士山は高さが日本一であるだけでなく、姿形にも恵まれ、才色兼備の貴婦人のようである。それ故、古来信仰の、あるいは詩歌や書画の対象とされてきた。

測量の分野では、象徴的な山として標高測定の対象となり、数多くの測定結果が報告されている。測量方法は、アリダードによる三角法、象限儀、バロメータ、三角測量、最近では直接水準測量やGPS測量による報告もある。

その結果は、最低は明治5年（1872）のウィリアムの3,266m、最高値は万延元年（1860）のオルコックの4,322mである。伊能忠敬はというと、3,927.7mの値を得ている（3928mとも）。

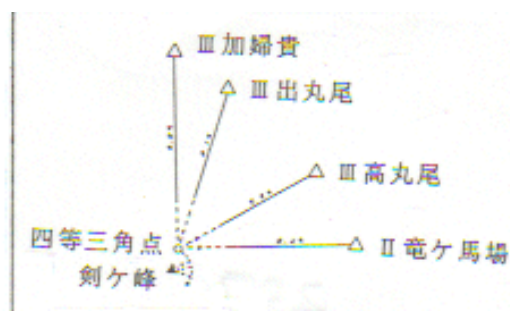
シーボルトの測量値は、後に外科医となった伊予の二宮敬作（1804-1862）が、彼の指示に従い山頂に登り、バロメータにより測定したものといわれる。バロメータにより、山の高さを測定した嚆矢である。

三角測量の最初は、明治20年参謀本部によって、頂上北壁付近（富士白山）に四等三角点を設置し、標高1,200m付近にある4個の二、三等三角点から3,753.4mを求め、ここから平板測量の道線法で富士山剣ヶ峰の標高3,778mを求めた。この値は、大正15年に改測されるまで約40年間使用された。

その後頂上付近の三角点としては、この四等三角点の位置に明治23年に三等三角点標石が埋石されものを、大正15年に多少位置を変更した「二等三角点富士白山」と、同じ大正15年に剣ヶ峰頂上付近に埋石された「二等三角点富士山」が存在することになる。

大正15年のこのとき、「二等三角点富士山」の標高が測量されて、「（富士山）の」標高は3,776.29mとされ

たが、当時の「点の記」には、「真の頂上は標石の北方にあり更に15cmほど高い」と記されていた。



明治20年測量当時の高低平均図  
（「富士山の高さ」より）

昭和37年、国土地理院は、風雨などの影響で露出した「富士山」三角点標石を低下改埋した。標高は3,775.63mとした。担当の測量官は、m単位での標高に変更がないように文字どおり、3,775.50m以上に積み上げた。日本一であるが故の悩みである。

平成元（1989）年「測量の日」の記念事業として、「日本の山岳標高一覧」を作成するため、各地の山の高さの測定調査を行うことになった。富士山も調査が実施され、三角点の北方に真の最高所標高3,776.24mを得た。晴れて、3,776mの山になったといえる。

最近この三角点の傍に、日本最高所三角点のモニュメントを設置した。

### 富士山の主な標高測定結果

3,895 m	1727年、	福田某、	三角法
3,928 m	1803年、	伊能忠敬、	象限儀
3,793 m	1826年、	シーボルト、	バロメータ
3,476 m	1834年、	内田恭、	バロメータ
4,322 m	1860年、	オルコック、	バロメータ
3,266 m	1860年	ウィリアム、	バロメータ
3,778 m	1887年、	参謀本部、	三角測量ほか

（新版「山の高さ」鈴木弘道著より）

ちなみに、なぜ富士山に一等三角点が設置されていないのかというと。

一等三角点は、ほぼ5万分の1地形図一面に一点、約40km程度の密度で設置されている。その密度で三角網が構成できること、すなわち三角点相互間で観測が容易に行えることが必要である。

独立峰の富士山頂は、アルプスにある北岳などと異なり、40km内外の距離にある周囲の三角点から容易に観測できないためである。

# 棹地稲荷神社

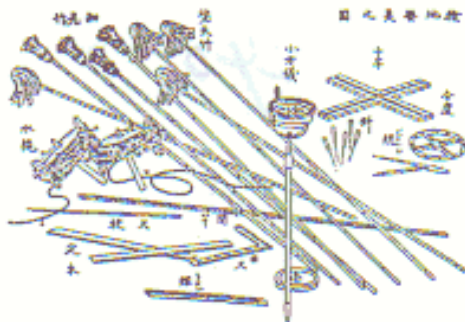
(静岡県富士宮市中央町7-3)



棹地稲荷神社

この神社の祭神は、食物、特に稲をつかさどる宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ）である。「宇賀の神（うかのかみ）は、穀物の神、転じて福の神、白蛇や狐を神として祭る」（広辞苑）という。

この神社前の碑文には、この祭神のことのほか、明治維新のころに行われた土地測量の際に使用した棹を奉納したことから棹地稲荷の名があると記されている。従って、日本で唯一？の測量の神様ともいえる。ちなみに、そのころの測量に用いられた棹の類には次のようなものがあつた。



検地用具の図

(「明治期作成の地籍図」佐藤甚次郎 古今書院より)

「棹・間棹・検地棹」；検地を行うとき、土地の広さを測るために使用した竹製の物差しで、一尺ごとに目盛りを付け、両端を銅などで包んだもの。

「細見竹」；検地用具の一種で、竿の先に藁束を付け、筆の四隅に立て目標とし、屈曲を取捨し平均を取るときに使用するもの。

「梵天竿」；竿の先に紙束を付けたもので、細見竹の中

央に立て前後の三竿を見通し、屈曲の取捨、平均を取り、縦横の中央に縄を張る目標に使用した。

この神社に奉納されたのは、どの棹だろうか。



忠敬の測量の図

(「忠敬罷り通る」半谷栄二 測量1951年9月号より)

# 「地名（じな）」という地名

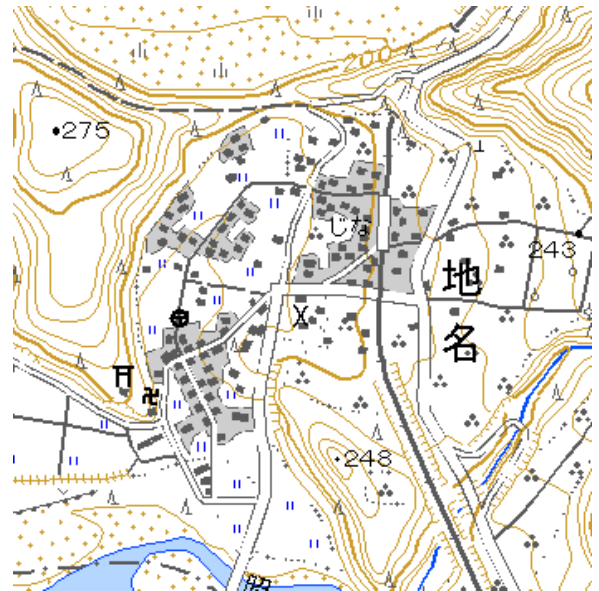
（静岡県榛原郡川根本町地名）

静岡県榛原郡川根本町に「地名（じな）」と呼ばれる地名がある。

地名村は、江戸時代以前から駿河国志太郡地名村として存在し、1889年（明治22）には、志太郡徳山村大字地名となり、1956年（昭和31）には合併して中川根村字地名となった。

「地名（じな）」の地名の由来はというと、「川名」、「山名」といったものと同様に、「〇〇のところ」というように使用されたものらしい。地図で分かるように、山が迫ったこの地域では、居住適地は限られていて、わずかな平地でも有効に利用されている。「地名」は「そうした土地のあるところ」ほどの意味だといわれる。

この地は、大井川の川止めのさいこは、藤枝宿から山間部を抜けて、対岸の「石風呂」へ盥（たらい）舟を利用して渡った場所で、これを「地名の廻り越し」と呼んだといわれる。





## 沼津兵学校跡の碑と沼津明治資料館

(沼津兵学校跡の碑：静岡県沼津市大手町 城岡神社境内)

(沼津市明治資料館：静岡県沼津市西熊堂372-1)



沼津兵学校記念碑

沼津市大手町 城岡神社境内には、明治27年徳川家旧臣によって建てられた沼津兵学校の碑があり、西熊堂にある沼津市明治資料館は、静岡徳川藩の藩校沼津兵学校を中心に、郷土の近代化の歩みを紹介している。

地図・測量、特に陸地測量部との深い係わりがある沼津兵学校（徳川家兵学校）は、明治初年、静岡藩（旧徳川将軍家）によって設立された学校である。

同兵学校は、明治政府や他藩のそれをはるかにしのぐ優れた教授陣と教育内容を誇り、当時最も高度の教育を施した学校であったことから、他藩からも例外的に留学する者が多く、全国の諸藩からは教師の派遣を要請してくるほどであった。

兵学校自体は、わずか3年半しか存続せず、その後明治政府に取り込まれ、陸軍士官学校の源流となったほか、附属小学校は日本最初の近代的小学校として、その後の近代教育制度に影響を及ぼした。兵学校で教え、学んだ人材の多くは、軍人はもちろんのこと官僚・学者・技術者・実業家・政治家・教育者などとして、明治期以降の日本の近代化を推進する指導的・中堅的存在として幅広く活躍した。

兵学校頭取は、オランダ留学した西周助(周)があたった。

兵学校教授には、のちに内務省地誌課長となり、「日本地誌提要」などの編纂に中心的役割を果たした塚本明毅（つかもとあきたけ 1833-1885）、陸軍参謀局地図地誌課に在籍し、『兵要日本地理小誌』を著わした中根淑（なかねきよし 1839-1913）、同じ地図地誌課などに在籍し、洋画の技術を製図や測量などに応用した川上冬崖（かわかみとうがい 1827-1881）らがいた。

また、幕府陸軍部内の士官に対し予備教育を行い、試験をもって迎えた資生生の中には、陸地測量部に在籍し、製図科長・陸軍少将となった早川省義（はやかわあきよし？-1903）、開拓使から陸地測量部へ進み日本水準原点の測量に係わった奈佐栄（なささかえ 1852-?）、そして付属小学校教授ののち、開拓使から陸地測量部へ進み一貫して三角測量に従事した関大之（せきだいし？-?）などがいた。

明治26年に兵学校記念碑の設立が計画され、同28年に実現した。平成3年（1991）には、破損により改築されたが、旧の兵学校記念碑は中根淑の撰文、書は後に農務局地質課に勤務する大川通久（おおかわつうきゅう 1847-1897）が担当した。



沼津市明治資料館

明治用水の基礎を築いた都筑弥厚の  
銅像と明治川神社(石川喜平の測量機  
器所蔵)

(都筑弥厚の銅像：愛知県安城市和泉町宮前 和泉町  
弥厚公園)

(明治川神社：愛知県安城市東栄町 22)



都筑弥厚像

(「江戸時代の測量術」展図録 安城市歴史博物館よ  
り、明治川神社蔵)



都筑弥厚の銅像

安城市和泉町の八剣神社の南、半場川に沿った小さな  
林の中(和泉町弥厚公園)には、上下姿に両刀を携え右  
手に扇子を持った代官姿の都筑弥厚(つづきやこう 1  
765-1833)の銅像がある。

弥厚は、1765年現在の安城市和泉町本竜寺付近で、米  
の売買、酒造業、新田経営などを営む豪農都筑家に生ま  
れた。二代目の弥厚は、これを経営する傍ら、芭蕉の流  
れを汲む師について俳句を学び、絵や漢詩にも興味を持

った人である。残っている俳句は30数句、そしてランや  
梅の絵も描いたと言われる。

弥厚が和泉の北東に広がる五ヶ野、安城野と呼ばれ  
る地の開発のため、台地を貫流する用水路の計画を企  
てたのは、40歳半ばの頃だといわれている。

そして、57歳の文政5年(1822)石川喜平(いしか  
わきへい 1788-1862)の協力を得て用水路の測量に着  
手した。その測量が終わるのが、4年後の文政9年  
であったという。村々の地主などの少なからぬ抵抗もあ  
ったのであろう。

翌年には幕府勘定奉行に「新開願書」を提出するが、  
許可が下りるのはさらに7年後の天保4年(1833)の  
ことである。残念ながら弥厚の事業は、その年に一枚  
の測量図を残して69歳で病没したことで挫折する。用  
水路はおろか、一坪の開墾も実施しないままの他界で  
あった。

弥厚の用水計画は、小領主などの抵抗もあって成功  
しなかったが、それから約40年を経て、岡本兵松、伊  
予田与八郎らの新しい提案者の出現により明治12年  
(1879)に着手され、翌年には通水を開始した。岡本  
らは、弥厚の計画を継承し、計画に疑念を持つ村々の  
説得に力を入れたという。

用水と以後の整備によって新しく開かれた田は、約  
6,000haにもなり、この新開地農業は「日本のデンマ  
ーク」と呼ばれ、弥厚の永年の夢が実現した。

享和3年(1803)全国測量に際して、この地を訪れ  
た伊能忠敬を弥厚が案内している。その様子は、「測量  
日記(4月18,19日)」に「鈴木弥四郎(注：都筑弥厚  
のこと)と云う者…」と記されている。

伊能忠敬の測量に際しての地方の測量技術者などの  
訪問は、越中の石黒信由や讃岐の久米栄左衛門などが  
あり、大いに意見を交換し、親交を深めている。そし  
て阿波の岡崎三蔵に至っては、長男を偽名で測量隊に  
参加させ、技術を盗み見しようとしたことなどが知ら  
れている。弥厚もまた忠敬の大事業の遂行について、  
あるいは測量技術について意見の交換をしたのであろ  
う。

その内容は、測量を担当した石川喜平にも伝えられ  
たであろう。いや同行し、見聞きすることで新しい測  
量技術について知識を深めたと考えることもできる。



石川喜平が使用した測量機器  
 (「江戸時代の測量術」展図録 安城市歴史博物館より、明治川神社蔵)



明治川神社

石川喜平 (いしかわきへい 1788-1862) は、碧海郡高棚村 (現安城市) の和算家であったという。

同じ碧海郡の関流の和算家清水林直に学び、免許を受け、村の内外には多くの門弟を持っていたというほか、詳細は不明である。

残された書籍の多くは和算と天体観測記録など曆に関するものが多いが、僅かに測量に関するものも含まれている。その中には、喜平の手による水路計画図 (明治用水土地改良区所蔵) があり、流路と台地の輪郭そして水路計画線とともに、主要な村々の間は線で結ばれ、朱で距離が書き込まれている。

使用した測量器具 (木製の見盤) は、明治川用水会館に保管されている。見盤の上部には十二支が刻まれ磁石も埋め込まれていたようである。また、取り付けられた小さな二本の角材には中心に小穴があげられており、これにより目標方向を視準し、磁石により方位を読みとったと思われ、金属製の測量機器が出現する以前に地方で使用された木製見盤の典型である。



## 松浦武四郎記念館

(三重県松坂市小野江383 059856-6847)



松浦武四郎

(「松浦武四郎記念館」パンフレットより)

松浦武四郎(まつうらたけしろう 1818-1888)は、伊勢国一志郡雲津川南須川村(現三雲町)に生まれた。

幼名を竹四郎といい、6歳の時から禅僧に手習いを受け、各地の名跡などの知識を得たといわれ、9歳のころから諸国遍歴の志を抱くようになった。天保4年(1833)に江戸に出て(家出)、これを実行に移し、16歳の時からわずか4年間で日本全国の名跡、山岳などを回り、多くの旅日記を著した。もっとも前半は、家出を繰り返しながらの立身を夢見ての旅であったが、その後は諸国の知識人との交流の諸国遊歴であった。

弘化2年(1845)蝦夷地を探検してからは、「東西蝦夷日誌」などの多くの著作を手がけ、「東西蝦夷山川地理取調図」などの多くの地図を残した。特に、「取調図」は主に海岸線だけの調査である「伊能図」を補い、内陸の詳細な河川名・地名が調査・記入されている。

武四郎は、単に探検家・地図製作者としてだけでなく、旅行家、地誌学者、出版者としても成果を上げ、晩年は古銭蒐集や考古学にも関心を寄せたという。特に古銭蒐集では、「古銭御遣し被下候。当時古銭家番附に而者日本番附二、三番位に候。」と武四郎が日本で二、三番目の蒐集家であることを自慢していたようである。

67歳から大台ヶ原を3回踏破し、69歳になってから富士登山に挑戦するなど、生涯衰えを知らない探検家だったが、明治21年、70歳で死去した。

記念館には、「北海道国郡図」「樺太大地図」のほか、「石狩日誌」「夕張日誌」などの蝦夷探検日誌と武四郎を偲ぶ品々が展示されている。記念館の東北約350mのと

ころが生誕の地であり、大台ヶ原山上の名古屋谷に分骨碑がある。(→松浦武四郎の墓)



松浦武四郎記念館

(「松浦武四郎記念館」パンフレットより)

## 館潔彦の墓

(三重県桑名市東方1,350 照源寺)



館潔彦（「北海道登山小史」より）

一等三角点といえば、この人を紹介しなければならない。

館（館）潔彦（たてきよひこ 1849-1903）は、嘉永2年伊勢国桑名で桑名藩士館淳夫の長男として生まれた。幼名を釘太郎といい、明治元年19歳のとき東京に出て、門人30数名ばかりの岸永衛の塾で英学と数学を学んだ。

明治5年工部省に出仕し、測量四等少手に任ぜられた。当時工部省の測量は、測量師長マクヴィーンを筆頭に、ジョイナー（H. B. Joyner ?-?）、ハーデイ（J. T.ハーデイ ?-?）、シャポー（Henry Scharbau ?-?）らの英人を招聘して技術の習得に努めていた。館は早速、東京府下の三角測量に従事したと思われる。

同測量では、基線を越中島と洲崎弁天島間に設定し、十三カ所の三角点を選定した。その時（明治5年）観測に使用できた経緯儀は三台で、招聘外人だけが使用可能で、日本の技術者の使用できるものがないため、工部省は館をして横浜で必要機器を購入した。

同9年内務省が火災に遭い、先に英人らの手で作成した東京府下測量の原図が灰となるに及んで再び館、阿蘇沼次郎、三輪輔之らの日本人の手で三角測量に着手した。この時も明治7年に設置した本所一ツ目と同二ツ目間の基線を再測し、二十六カ所の三角点を増設し標石も埋設した。館らはこれらの測量で、近代測量の基本を習得したと思われる。

その後、基線測量などに従事し、陸軍省参謀本部に測量局が設置されるに及んで陸軍技師となり、一等三角測量の選点作業を担当する。アルプスから九州、四国、中国、北海道、そして千島の果てまで日本国中の山野を跋

渉することになった。

登山技術や装備が未熟な時代にあつて、未開の山岳地帯を鳥打ち帽子に洋服、脚絆の出で立ちで測夫を従えての測量は、文字どおり言葉では言い現せないものに違はなく、幾多の危険に遭遇したに違いない。

ウエストン著の「日本アルプス登山と探検」（角川文庫）には、「政府の役人（陸軍省の調査官）が穂高岳の最初の登山に成功したが、そのとき彼は山頂近くの岩場で滑落し、岩に激しくぶつかったが、奇跡的に助かった」と記している。

実際に館の次男「館香緑」の懐古録でも、「父は全国の山を征服したが、ただ一度命を落としそうな危機に遭った。それは北アルプス穂高で、槍ヶ岳の帰途に岩角につまずいて急斜面を滑り落ち、この時ばかりは父も南無阿弥陀仏と唱えたという。事故後には富山（高山か）の病院に運ばれ、幸い十数日間の入院で全快したが、その時の鮮血に染まった洋服は永く我が家にあつた」と書き記している。

このように館の名は、測量技術者としてよりも登山家の中で有名であるが、もっと測量技術者の中で尊敬され理解されても良い人である。

内では、歌と画をたしなみ50数点のスケッチを残していたという。苦勞を供にした妻そでの墓前での歌を紹介しておこう。

手向けつる花よりもまづ袖の上に  
露おくつきの五月雨のいろ

明治36年54歳で退職、同38年に退官し、昭和2年に郷里の桑名で亡くなった。墓は、桑名市の照源寺裏手にあり、法名を翠松院剛誉潔彦居士という。墓地には、愛妻そでの実家柳本（通義）家の墓石が並んでいる。（→一等三角点）

三重県立美術館（地図製図の先駆者  
岩橋教章の「鴨の静物」所蔵）

（三重県津市大谷町11 059-227-2100）



岩橋教章肖像

（「測量」日本測量協会1967年より）

三重県立美術館は、地図製図の先駆者岩橋教章（いわはしのりあき 1835-1883）の、杉板に吊された本物の鴨と見あやまるほどの精緻な絵画「鴨の静物」を所蔵している。

岩橋教章は、天保6年鳥羽藩士岩橋庄助の長男として生まれた。長じて、医師で洋学者であった安藤文沢に学ぶと同時に、狩野派を学んだという。家督を継いだ教章は、幕府操練所に出仕して、神奈川港の実測図調製に際しては絵図方助手として、江戸湾測量にも荒井郁之助らとともに従事していた。

その文久元年（1861）10月には、幕府御軍艦操練所絵図方出役に命ぜられていた。

文久2年に幕府による伊勢・志摩、尾張沿岸の測量には、後に初代水路部長となる当時津藩の柳憎悦らとこれに加わったという。その成果は「伊勢志摩尾張付紀伊三河」（大図）となり、航海用沿岸海図の最初のものとなったが、岩橋も絵図方として、その一端を担ったに違いない。

その後、横須賀沿岸などの測量にも絵図方として参加したが、大政奉還（1867年）を迎え、荒井郁之助らと同様に榎本武揚と行動を共にし、維新を迎える。

維新後は、これも他の幕臣と同様に一時期謹慎するが、やがて新政府に仕える。新政府では、兵部省や海軍省操練所などを経て、1873年（明治6年）には、ウイーンで開催された万国博覧会に随員として参加した後、銅版画や石版画の技法をウイーン地図学校などで取得して翌

年帰国した。

三重県立博物館が所蔵するこの作品は、帰国の翌年に病にあった部屋の板壁に吊した見舞いの鴨を描いたものである。当時のヨーロッパには、精緻に静物画を画く風があり、これを引き継いだものというから、在欧中に同様の絵画に接する機会に恵まれたものと思われる。

岩橋は帰国後、紙幣寮、修史局を経て内務省地理局勤務となり、多くの銅版や石版技術者を育成したといい、この間に「地理製図式」（明治9年）、「測絵図譜」（明治11年）などの刊行にあたり、銅版技術を生かして内務省地理局編輯五千分の一の「兵庫神戸」、「横浜」の作成にもあたった。

明治16年（1883）に没し、墓碑は東京都台東区谷中谷中霊園乙1号7側19番にある。



「鴨の静物」（三重県立美術館絵はがきより）



岩橋教章の墓



## 地震の神様（大村神社）

（三重県伊賀市阿保1555）



大村神社の要石

ベテラン測量士の中には、水準測量の神様と呼ばれる人が存在する。水準測量は排気ガスの漂う国道筋などのけっして良いとはいえない環境の中で、ひたすら冷静に観測しては歩むという単調な作業である。この仕事を冷静にかつ慎重に進め、再測をしないどころか精度よく実施するものだけが測量の神様と呼ばれた。

そのほか測量に関連した神様のことでは、その当時東京大学助教授だった今村明恒のことを地震の神様と呼ぶものがある。彼は、一九〇六年のある論文で「五十年以内に相模沖を震源とする大地震の発生があるだろう。そのときには、火災で二十万人にも及ぶ犠牲を出す危険性もあるだろう」と関東大震災を予知した。それが十八年後に現実のものとなったことから、彼のことを地震の神様と呼んだのである。

三重県伊賀市の青山高原には、地震の神様を祀るという大村神社がある。もちろんのこと、ここに今村明恒が祀られているということではない。本殿の横には、二つの不思議な石があって、これが地震の神様の謂れだという。ひとつは、「要石」といって、これが地震を防いでいるのだという。この石の下には、地震を呼ぶと言う巨大なナマズがあって、このナマズが暴れないように要石が抑えているというありきたりの話。11月3日の例祭には、鯰神輿が町内を練り歩くという。

同様の話は、日本各地にあって茨城県鹿島神宮の要石は特に有名である。さらに、静岡県浜松市北区細江町の細江神社も地震の神様として名高い。

大村神社の要石の前にはもうひとつの石、これは新し

そうなナマズの石像があって、これに水をかけると願いがかなうという。これは、おまけのようなもの。

同神社は延喜式にも記されて、国の重要文化財になっている。入母屋造の檜皮葺きで、桃山時代の特徴を表した朱塗りの建物にゾウの彫刻などが鮮やかである。